

35 三陰交の明堂関係医書の主治病證と 経脈病證

木場 由衣登

三陰交は第一〇一回日本医史学会学術総会では「三陰交の歴史」と題し、三陰交は婦人科病證の治効穴であるという現代の認識についての考察を行った。これは失伝した『明堂経』（又は明堂）と関連する条文を記載する医書を参照することで古代における鍼灸の実像を推定し、その源流の復元を試みたのである。『明堂経』は後漢代に成立したとされ、この明堂関係の条文から想定される主治病證は紀元一〇〇年代頃のものである。

後世に影響の大きい宋代の『銅人腧穴鍼灸図経』が成立する以前、随唐代までの医書には三陰交と婦人科病證及び産科疾患を明確に関連づける記載はみられなかった。元版『千金方』と『千金翼方』に三陰交と婦人科病證の記載が見られたが、これは随唐期の条文とは言い難

い。元版『千金方』巻四第三（宋代『千金方』巻四では第一第二のみ現存）には「婦人漏下赤白及血、灸足太陰五十壯、穴在内踝上三寸、足太陰脛内踝上三寸、名三陰交」とあり、『千金翼方』巻二十六には「産難、月水不禁、横産胎動皆針三陰交。婦人下血、泄痢、赤白漏血、灸足太陰五十壯、在内踝上三寸。百壯主腹中五寒」とある。また宋代『孫真人千金方』巻四第三には「白崩、灸小腹横文、当臍孔直下百壯、又灸内踝上三寸百壯」と「女人下漏赤白及血、灸太陰五十壯、穴在内踝上三寸是」とあるが、共に「内踝上三寸」とあるのみで、これらを率直に三陰交の婦人科病證主治の根源と考える訳にはいかない。しかし「内踝上三寸」と婦人科病證との関連を示しており、これらが後世に「三寸」に統一された三陰交が婦人科病證の主治穴となった根拠である可能性は高い。

三陰交と婦人科病證との関連を明堂関係の医書中において見出すことはできたが、当時の三陰交には穴位が「在内踝上三寸」と「在内踝上八寸」の説が存在しており、宋代の『銅人腧穴鍼灸図経』による「三寸」の統一以後、婦人科病證と三陰交の主治病證は定着したと考えられ

る。それでも『銅人腧穴鍼灸図経』中の婦人への応用は何処が由来なのかを検証する必要がある。

現代では三陰交の位置は「三寸」が一般化しており、「八寸」の位置は誤りであると短絡的に考えてしまう傾向がある。

今度は「三陰交」という穴名そのものに着目してみる。三陰交は晋代の『甲乙経』巻之三・足太陰及股凡二十二穴・第三十に「足太陰、厥陰、少陰之会」とあるように足の三陰の経脈が交流するという意味であり、三陰交はまず「足太陰之脈」及び「脾蔵」との関連が想像される。そして『靈枢』経脈篇により、足の三陰の経脈がどこで交流するのかを確認すると、この交流点が経脈篇の「脾足太陰之脈」ではなく、「肝足厥陰之脈」の条文に記載があることが確認できる。しかも「三寸」ではなく「八寸」である。ここから『甲乙経』等の「三寸」の三陰交が誤りとする根拠はない。(参考までだが元版『千金方』と『千金翼方』の婦人科病證を条文に含む三陰交は「三寸」である。また一方、『靈枢』経脈篇の経脈病證において婦人科病證と特定できるのは「肝足厥陰之脈」の是動病「腰

痛、不可以俛仰、丈夫腓疝、婦人少腹腫、甚則鬱乾、面塵脫色」のみである。これを三陰交の明堂関係における主治病證と比較しても関連性は確認できない。むしろ『靈枢』経脈篇の経脈病證を見る限り、三陰交を婦人科病證と関連づける場合は「八寸」の三陰交を用いるのが妥当のように思える。『甲乙経』に記載される三陰交の主治病證の「足下熱痛、不能久坐、湿痺、不能行」もまた経脈病證とは類似しないが、主治病證と経脈病證及び経脈の走行と密接である可能性は高い。

(日本鍼灸研究会)